

リスク部会報（第9号）

2022年3月発行

目次

- (1) 新リスク部会長からのご挨拶
- (2) リレーエッセイ「テクノロジーを語り合うことの困難と、その先に」（弘前大学 日比野 愛子先生）
- (3) 「コロナ禍における国際会議運営」（国際小委員会）
- (4) 「2021年秋の大会」におけるリスク部会賞（奨励賞）の授与について（企画・研究小委員会）
- (5) 第9回全体会議@「日本原子力学会2021年秋の大会」の報告
- (6) 「日本原子力学会2021年秋の大会企画セッション」の報告
- (7) ASRAM2021の開催報告
- (8) セミナー“Risk-Informed Systems Analysis (RISA) Activities and Future Directions”の報告
- (9) 令和4年度リスク部会運営体制（役員名簿）
- (10) 今後の活動
- (11) 編集後記

(1) 新リスク部会長からのご挨拶

リスク部会では前部会長である東京大学 山口 彰先生の退任に伴い、原子力安全推進協会 成宮 祥介氏が新しい部会長に就任することとなりました。ここで新リスク部会長よりご挨拶を申し上げます。

第2代の部会長に就任いたしました JANSI の成宮祥介と申します。

リスク部会は、原子力学会における技術部会として久々に2017年に新設された部会であり、300名を超える原子力学会会員の皆様のご協力、ご指導のおかげで5年目を迎えております。初代部会長の東京大学山口彰教授を中心に、我が国におけるリスクにかかる研究開発、リスク評価の実践、教育などに役立つ活動を続けてまいりました。

リスク部会の活動としては、国内専門家に加え海外専門家にも入ってもらいリスク評価や活用に関するセミナーやシンポジウムの開催、国際会議の主催共催、研究専門委員会へのPRA手法の現状把握と今後の方向性にかかる協力、学会誌におけるリスクにかかる解説記事の特集などを積極的に展開してきました。



一般社団法人 原子力安全推進協会
成宮 祥介

PRAなどのリスク評価方法は、その不確実さを対象システム全体の連動として捉え定量評価できるものである点が特徴であり、対策に大きな余裕を持たせること以外の対策をとることに繋がる重要なものです。特に、我が国のように地震や津波などの自然災害が多発する地域において原子力施設を安全に使い利得を享受するためには、外的事象PRAの実施とそこから得られる知見を活用することが有効です。リスク評価とその活用により、目の前だけでなく将来におけるリスクにも着目し、関係する多くの要素を考慮することは、原子力施設の安全な利用を実現することに貢献し、将来の人類の存続に繋がると期待できます。

リスク部会は、会員各位の諸活動に役立ち原子力施設の継続的な安全性向上に貢献できるように、セミナーやシンポジウム、国際会議の開催、など、リスクに関する発信や意見交換の機会を設けていく所存です。ますますのご支援を賜りますようお願い申し上げます。

(2) リレーエッセイ「テクノロジーを語り合うことの困難と、その先に」 (弘前大学 日比野 愛子先生)

1. テクノロジーの ELSI、RRI

新しいテクノロジーと社会との関係性を考えるときのキーワードとして、ELSI、あるいは、RRI といった用語がしばしば登場するようになってきた。前者は、Ethical Legal and Societal Issue (倫理的・法的・社会的課題)、後者は、Responsible Research and Innovation (責任ある研究とイノベーション) の略語である。ELSI の概念は、1990 年代にヒトゲノム計画を推進していく文脈の中で提唱された。科学研究の開発にあたっては、同時に社会への影響を検討する活動が重要だとして、それを制度化したものが ELSI である。ヒトゲノム計画以降も、これまでにさまざまなテクノロジーの ELSI プロジェクトが蓄積されてきた。一方、RRI は、よりテクノロジーの上流(萌芽段階)での議論や課題検討を重視する*1。RRI は単純な調査・検討を意味するのではなく、ELSI でも活用された市民参加型手法などを踏まえつつ、調査や検討の成果を作動中のテクノロジーにフィードバックする過程を重視するといえよう。したがって、社会課題の検討こそを更なるイノベーションにつなげようとする戦略性も強くみられる。日本では ELSI/RRI の両者が一緒に登場したようにも見えるが、欧州では、ELSI への議論の蓄積や反省を踏まえて、RRI へと焦点が移行しつつあるのが現状である。

上記のように力点の置き所に多少違いがあるものの、ELSI と RRI は、新しい科学やテクノロジーが実装されていくにあたっての課題を見出し、その解を社会全体で構築していく姿勢を共有している。つまり、ELSI/RRI では、対話を通じた解の模索がともに中核に置かれている。とはいえ、作動中のテクノロジーについての語り合うことは容易ではない。萌芽的な段階ではテクノロジーの不確実性が大きく議論する材料がない。かといって、テクノロジーが成熟した後の対話は実質的な問題解決につなげることが難しいというジレンマ(コリンリッジのジレンマ)があることを別稿(『岐路に立つ原子力』)で紹介させていただいた*2。本稿では、このテクノロジーの対話の困難について補足してみたい。

2. 曖昧回答と集合的否認

筆者は社会心理学を専門としており、一般の人々(非専門家)がテクノロジーに対して抱く意識を質問紙調査等を通じて探求することが多い。こうした研究でしばしば考えさせられるのは、新しいテクノロジーに対してそもそも人々ははっきりとした態度を形成しにくい、という問題である。テクノロジーの理解が難しい場合に「まったく分からない」と議論の俎上から漏れ落ちてしまう層がいる。また、仮にある程度の理解ができたとしても、テクノロジーの持つ不確実な性格ゆえに、利用の是非は「分からない」と答えるのは多くの人々の素朴な反応である*3。この「分からない」に少しでも迫れないかと、筆者は遺伝子組み換え食品、また、近年ではゲノム編集や合成生物学に対する人々の「分からない」反応に注目した分析を行ってきた。ゲノム編集と合成生物学に関する意識調査では、通常用いられやすい「賛成/反対/分からない」の区分ではなく、「賛成

／反対／両側面がある／まだ答えられない／私が答えることではない」の 5 区分を選択肢として用意したところ、賛成あるいは反対の態度を表明した人々はむしろ少数であったことが示された*4。テクノロジーをめぐるコミュニケーションの困難といえば、意見の対立が想定されがちである。しかしそもそも意見がない（見えない）、という問題にまずは接近する必要があるのだ。

さて上記の「曖昧回答」は、テクノロジーの萌芽段階で生じやすいとも考えられる。萌芽テクノロジーの問題は同定しにくく、それがコミュニケーションの成立に齟齬をきたすというのは理解しやすい。それでは、「まさに今、大きな問題が生じている」という認識が持たれているならば、テクノロジーについての対話はどううまく運ぶのであろうか。残念ながら、直面している問題が深刻であればあるほど、むしろその問題を見て見ぬふりをする否認がおこり、その方が対話の活動にとってはより深刻かもしれない。集団力学（グループ・ダイナミックス）で災害被災地域のフィールドワークを続けてきた宮本は、「集合的否認」が地域コミュニティを覆っていることの問題性を指摘した*5。宮本の議論は、集落の消滅を当事者たちが見て見ぬふりをするという問題を取り上げ概念化したものである。しかし、集合的否認という観点は、より広くくりとなる日本社会でのテクノロジーの語りにくさ、特に福島第一原子力発電所事故の語りにくさや、そこから本来展開されてよい原子力の今後についての対話の不在を考えるとときに参考となる。

3. 言語化への道

対話の困難とは、意見の対立だけではなく、意見の不在（曖昧回答）や、問題そのものの無化（集合的否認）をも含む点に触れてきた。それでは、このように言語化が拒否されている地点から対話を起こしていくにはどうしたらよいただろうか（もちろん対話を起こすことの是非を議論する必要もあるだろうが）。先の『岐路に立つ原子力』では、生命科学技術、とりわけ合成生物学の ELSI でアートが注目されている動向を紹介し、原子力の対話にもヒントとなるのではないかと提起した。ELSI とアートが接近している背景には、アートという媒体が、テクノロジーと社会との複雑な関係性を個々の要素に必ずしも還元することなく表現できること、曰く言い難い、言語化しにくい社会の違和感を表現することに長けている点あげられる。また、アートという媒体が投げかける問題提起は、提起の内容が明確には言語化されていない。そこから何を読み取り、言語化していくかのプロセスは開かれており、言語化の作業を皆が担うことになる。そこでは、専門性の有無に関係なく、誰もが語る立場に置かれる。こうしたことから、アートという媒体はたとえば既存の倫理の枠組みや何かしらの専門用語を用いずとも問いを投げかけ、議論を起こす力を持つ。テクノロジーをめぐる対話において、技術そのものの理解の達成や、論理的な説明、真摯な対話に臨む姿勢は捨てるべきではない。しかし、言語化の拒否という局面にあって、アートのような媒体は、単なる娯楽という意味ではなく、非・言語の対話の端緒になりうる場として可能性を持つ。原子力問題をはじめ成熟後のテクノロジーを覆ってしまう集合的否認ももしかしたら溶かす力があるのではないか。

- * 1 吉澤剛 (2013) 「責任ある研究・イノベーション: ELSI を越えて」 研究 技術 計画 28(1) 106-122.
- * 2 日比野愛子 (2021) 「第9章 (9. 3) ELSI の紹介」 (吉川榮和監修、吉川榮和・田邊朋行・五福明夫・日比野愛子・伊藤京子著 『岐路に立つ原子力(上・下)』所収) <http://symbio-newsreport.jp.org/?type=report&action=detail&clsf=2&id=2#> (最終訪問日 2022 年 2 月 28 日)
- * 3 日比野愛子 (2010) 「科学技術に対する態度における DK 回答の意味」 社会学評論 60(4) 554-569.
- * 4 Aiko Hibino, Go Yoshizawa, Jusaku Minari (2019) Meaning of Ambiguity: A Japanese Survey on Synthetic Biology and Genome Editing, *Frontiers in Sociology*, 4(81).
- * 5 宮本匠 (2019) 「人口減少社会の災害復興の課題」 災害と共生 3(1) 11-24.

(弘前大学：日比野愛子)

(3) 「コロナ禍における国際会議運営」 (国際小委員会)

2021 年 10 月 25 日 (月) ~27 日 (水)、ASRAM2021 (Asian Symposium on Risk Assessment and Management、リスク評価とマネジメントに関するアジアシンポジウム 2021) が中国主催のバーチャル会議として開催されました。

本シンポジウムは、日本原子力学会の共催により、原子力分野におけるリスク評価及びリスクマネジメントの研究者、利用者及び規制担当者が参加し、リスク評価に基づく意思決定に有効な確率論的リスク評価 (PRA) に代表される確率論的手法の研究開発や、その応用としてのリスクの評価およびマネジメントに関する研究を発表するとともに意見交換を行い、アジア域における現状の認識および合意形成を図ることを目的としています。20 余年にわたり日韓で開催されてきた PSA ワークショップの後継として、中国、アジアの原子力新興国も参加する形で 2017 年から開催しており、ASRAM2017 (横浜)、ASRAM2018 (中国廈門)、ASRAM2019 (韓国慶州) で 3 か国を一巡しました。二巡目に入り、ASRAM2020 は京都開催の計画で準備を進めていましたが、2020 年春以降、世界を一変させた新型コロナ禍により大幅な計画変更を余儀なくされ、初めてのバーチャル会議に取り組み、皆様のご尽力により成功裏に開催しました。2021 年も状況は変わらず、ASRAM2021 は中国主催のバーチャル会議となりました。ASRAM2021 の概要は 2022 年 1 月発行のリスク部会ニュースレターをご参照ください (<http://risk-div-aesi.sakura.ne.jp/documents/newsletter/N202201.pdf>)。

この他、米国 ANS 主催の PSA2021 も 2021 年 11 月 7 日~12 日、バーチャル会議で開催されました (<https://www.ans.org/meetings/psa2021/>)。

また、今後、以下の国際会議が予定されています。新型コロナ禍も 3 年目に入り、徐々に落ち着きつつあり、2022 年は対面の会議が予定されていますが、状況により変更もあり得るので注意が必要です。

- PSAM16（米国ハワイ州ホノルル）
開催日：2022年6月26日（日）～7月1日（金）開催予定
<https://www.iapsam.org/PSAM16/>
- ASRAM2022（韓国大田）
開催日：2022年11月30日（水）～12月2日（金）
Abstract締め切り：2022年4月30日（土）
<http://asram2022.org>（開設予定）
- PSA2023（米国テネシー州ノックスビル）
開催日：2023年7月15日～21日
<https://www.ans.org/meetings/view-364/>

（４） 「2021年秋の大会」におけるリスク部会賞（奨励賞）の授与について（企画・研究小委員会）

リスク部会では、原子力施設のリスク評価分野における若手研究者・技術者（40才以下）の奨励を目的として、本分野の研究・技術開発等にかかる活動の成果を「秋の大会」または「春の年会」で発表し、その内容が学術的・技術的に優れていると認められる発表に対してリスク部会賞（奨励賞）を授与しています。3回目となる「2021年秋の大会」においては、リスク部会長を委員長とした選考小委員会による厳正な審査に基づいて、以下の2名に奨励賞を授与することを決定し、表彰状及び副賞の盾を贈呈いたしました。

氏名 張 承賢
所属 東京大学（現北海道大学）
受賞内容 ファジィ推論を用いたマルチユニット影響を考慮した人的過誤率評価

氏名 廣内 崇幸
所属 東芝エネルギーシステムズ株式会社
受賞内容 津波PRAに関する技術基盤の構築
その15：実機を対象とした津波レベル2PRA評価（2）放出カテゴリ分類

リスク評価分野の更なる発展のためには、リスク評価に必要な多様な技術を開発するとともに、リスク評価から得られる情報を的確に分析し、安全性の向上等に効果的に活用する人材が不可欠です。リスク部会の若手部会員の皆様、原子力学会の学生会員の皆様には、専門知をより一層深め広げるためにも、研究・技術開発等に

かかる活動の成果を積極的に学会の場で発表し、学会に集まる多くの専門家と議論することをお願いいたします。

(5) 第9回全体会議@「日本原子力学会2021年秋の大会」の報告

<http://risk-div-aesj.sakura.ne.jp/meeting.html>

日時：2021年9月9日(木) 12:10~12:50

場所：オンライン開催 G会場 (Zoom ルーム)

議事：

1) 開会挨拶：山口部会長

- ・本日は多くの方にお集まりいただき感謝する。今回もオンライン開催となったが、34名と多くの皆様に全体会議に参加いただいている。
- ・リスク部会を2017年に設立して以降、現在部会員は300名を超え、原子力学会の中でも大きな部会の一つとなった。
- ・リスク部会を設立して以降約4年間、ASRAMという国際会議、安全目標に係るシンポジウム、INL Curtis Smith氏のご講演、TECDOCセミナーの開催など、積極的に活動も開催してきた。また、部会報も毎年発行している。これらは部会員の活動の賜物である。これらの活動を通して、リスク評価の高度化やリスク情報活用が進むことを期待している。
- ・本日は、運営委員より2021年度上期活動報告や下期以降の活動計画をご報告をさせて頂く。活発なご意見を頂きたい。

2) 運営委員の変更（山口部会長より退任のご挨拶）：山口部会長

- ・リスク部会の活動は年々充実してきており、毎年発刊物を出すなど成果も出てきている。
- ・リスク部会が設立してから4年間が経過したということもあり、部会長を退任させて頂きたい。
- ・これからは部会員として、様々な形で関わってまいりたい。また、新たなリスク部会運営体制のもとでリスク部会を盛り上げていければと思っている。

3) 運営委員の変更：成宮副部会長

- ・山口部会長退任に伴う新たな運営体制として、JANSI 成宮氏が部会長、電中研 NRRC 喜多氏が副部会長となることについて、異議なく承認が得られた。
- ・総務・財務小委員会では、電中研 NRRC 喜多氏が委員長となること、関西電力橋田氏が退任して国政氏が参画すること、MRI 杉野氏が再任することについて、異議なく承認が得られた。
- ・企画・研究小委員会では、アドバンスソフト山根氏が退任することについて、異議なく承認が得られた。
- ・国際小員会では、東京大学高田先生が参画することについて、異議なく承認が得られた。

4) 運営委員の変更（新部会長、新副部会長、新任委員よりご挨拶）

・（成宮氏）山口部会長からお話があったように、4年前にリスク部会を設置した。日本原子力学会としては久しぶりの部会設置であったと思われる。リスク部会ではこれまで、国際的な活発な活動を実施してきた。リスクという言葉は、最近は現場を含めて多くの方が使うようになってきた。これは大きな進歩でもある。今後もこの流れを是非進めていければと思っている。

・（喜多氏）東京電力HD出身であり、現在NRRCに出向中である。出向者であるので、いつまでこの立場でいられるかは分からないが、今後もしっかりと副部会長としての責務を担わせていただく。

・（国政氏）橋田氏の後任ということで、就任させていただいた。以前はリスク評価業務を実施していたが、至近では3年ほど現場業務をしていたこともあり、早くキャッチアップできるようにしていきたい。

・（高田先生）4月1日付けで東大に移籍した。国際会議等盛り上げてまいりたいと思っている。

5) 2021年度上半期活動実績／2021年度下半期・2022年度活動計画：各委員長（または代理）

・各小委員会より、2021年度上半期活動実績／2021年度下半期・2022年度活動計画について報告があった。

・総務・財務小委員会より2021年度予算計画についてご説明があり、異議なく承認が得られた。

・総務・財務小委員会報告に併せてリスク部会奨励賞の表彰があり、受賞者である東芝プラントシステム株式会社青木氏、大阪大学竹田氏、東京都市大学大原氏が表彰された。

・研究専門委員会報告において、研究専門委員会設置の背景、目的、活動成果等の概要についてご説明があった。また、詳細は全体会議後の企画セッションにて報告予定である旨、ご説明があった。

6) 質疑応答

・質問はなかった。

7) 連絡：成宮副部会長

・リスク部会に今後期待すること等について、リスク部会ホームページのお問い合わせ等より頂きたい。

・引き続き企画セッションにご参加ください。

8) 閉会挨拶：山口部会長

・お忙しいところ、全体会議にご参加いただき、感謝いたします。引き続きリスク部会の活動にご協力いただけるとありがたい。

（6）「日本原子力学会2021年秋の大会 企画セッション」の報告

<http://risk-div-aesj.sakura.ne.jp/seminar.html>

日時： 2021年9月9日（木）13:00～14:30

場所： G会場（Zoom オンライン）

参加者： 65名程度

座長： （原子力機構）丸山 結

PRA の技術高度化に関する最新知見の有用性を専門家により評価するとともに、得られた情報を PRA に関わる組織で共有し、効果的・効率的な PRA 手法の発展に資する事を目的とする「確率論的リスク評価の活用及び手法調査」研究専門委員会における調査結果に基づき、PRA 技術の活用・高度化に関する提案を行うとともに、国内研究機関の研究動向を紹介した。また、2つの国際学会 PSAM15 と ASRAM2020 における PRA 技術高度化の最新情報を紹介することにより、PRA の技術開発・活用に関する課題と今後の検討方針について議論を深めた。

【内容】

- (1) ASRAM2020 の動向報告 成宮 祥介（原安進）
- (2) PSAM15 の動向報告 張 承賢（東大）
- (3) 研究専門委員会の提案 牟田 仁（東京都市大）、當房 拓朗（東芝 ESS）
- (4) 国内研究機関の研究動向 玉置 等史（原子力機構）、氏田 博士（アドバンスソフト）

（敬称略）

発表資料及び会場での議論等の詳細については、リスク部会HPに掲載しています。

（7）ASRAM2021 の開催報告

<http://risk-div-aesj.sakura.ne.jp/newsletter.html>

2021年10月25日～27日にかけて、Webinar形式でASRAM2021（Asian Symposium on Risk Assessment and Management、リスク評価とマネジメントに関するアジアシンポジウム 2021）を開催した。本シンポジウムには日本、韓国、中国、米国から計約80名が参加し、計45件の発表があった。原子力分野におけるリスク評価及びリスクマネジメントの研究者及び利用者が活発に意見交換を行い、さらに学生にとっては研究成果を発表する貴重な機会となった。

詳細については、[ニュースレター“ASRAM2021特集”](#)に掲載しています。

(8) セミナー “Risk-Informed Systems Analysis (RISA) Activities and Future Directions” の報告

<http://risk-div-aesj.sakura.ne.jp/seminar.html>

2021年11月24日(水) 9:00-10:00、東京大学リスク俯瞰工学講座との共催により、ZoomによるWeb会議形式で、米国のアイダホ国立研究所においてリスク情報活用に関する先進的な研究を担当している Nuclear Safety & Regulatory Research Division の局長の Curtis Smith 氏を招き、「Risk-Informed Systems Analysis (RISA) Activities and Future Directions」というタイトルのセミナーを開催しました。

RISAの主な目的は、長期のプラント運用期間にわたって原子力発電所の経済性、信頼性を向上させ、安全性を維持することです。RISAは、安全裕度の最適化と不確かさの最小化に着目する手法で、原子力発電所の安全性と経済の両方が理解され、管理されていることを保証します。RISAの検討のゴールは、原子力発電所の安全裕度を正確に表現するRISAのツールの運用を開始する事、および、リスク情報を用いた裕度管理(Risk-informed margins management)の一部として原子力発電所の意思決定者を支援するために、安全裕度の定量化を組み合わせた先進的なリスク評価手法の産業界での適用について、妥当性を明らかにし、開発し、解析する事です。

発表資料及び会場での議論等の詳細については、リスク部会HPに掲載しています。

(9) 令和4年度リスク部会運営体制（役員名簿）

2022年3月18日全体部会で承認
(敬称略)

役委員会	氏名（所属）	役割
部会長	成宮 祥介（JANSI）	<ul style="list-style-type: none"> ・部会及び小委員会を統括 ・原子力学会代議員
副部会長	丸山 結（JAEA） 喜多 利亘（電中研）	<ul style="list-style-type: none"> ・部会長の補佐
幹事	各小委員会の委員長	
総務・財務 小委員会	◎喜多 利亘（電中研） ○木村 竜介（日立GE） ○国政 武史（関電） ○杉野 弘樹（MRI）	（総務） <ul style="list-style-type: none"> ・事務 ・部会の開催等 ・他の小委員会が所掌しない事項 ・部会等運営委員会委員 （財務） <ul style="list-style-type: none"> ・部会の予算策定、管理及び決算
企画・研究 小委員会	◎丸山 結（JAEA） ○氏田 博士（アトバソソワ） ○河合 勝則（MHI NSIツグ） ○張 承賢（北大） ○今井 俊一（東電HD）	（企画・戦略） <ul style="list-style-type: none"> ・部会の活動方針・戦略案の作成 ・活動方針・戦略に従った企画・執行 （研究） <ul style="list-style-type: none"> ・研究を活性化させるための活動の企画・遂行に関する事項 （人材育成） <ul style="list-style-type: none"> ・人材の育成、研究者・技術者の裾野を広げるための企画、活動
国際小委員会	◎菅谷 淳子（JANUS） ○白井 孝治（電中研） ○高田 孝（東大） ○田原 美香（東芝 ESS） ○村上 朋子（エネ経研）	<ul style="list-style-type: none"> ・国際会議等の開催 ・国際協力窓口 ・国外学協会との交流
広報・出版 小委員会	◎牟田 仁（都市大） ○井手 善広（アトバソソワ） ○蛭沢 勝三（電中研） ○倉本 孝弘（NEL） ○竹田 敏（阪大）	（広報） <ul style="list-style-type: none"> ・部会報、ニュースレターの発行 ・ホームページの作成・管理 （出版・編集） <ul style="list-style-type: none"> ・論文、論文集、教材などの出版・編集 ・編集委員会幹事会委員

◎：委員長、○：副委員長

(10) 今後の活動

リスク部会が主催・共催している講演会、企画セッション、学術会議等、直近のイベントをご紹介します。

学術会議

PSAM16 (米国ハワイ州ホノルル) 開催協力

2022年6月26日(日)～7月1日(金) 開催予定

<https://www.iapsam.org/PSAM16/>

ASRAM2022 (韓国、大田(Daejeon)) 開催協力

2022年11月30日(水)～12月2日(金) 開催予定

Abstract締め切り：4月30日(土)

<http://asram2022.org>

(11) 編集後記

リスク部会の第9号の部会報をお届け致します。

リスク部会報は、半年に一度、その期間での活動内容の報告・紹介につき、広報・出版小委員会にてとりまとめて発行をしています。記事の作成につきまして、お忙しい中で御協力いただいた方々、大変ありがとうございました。

今後とも、様々な活動を通してリスクに関する情報の発信を行っていきたいと考えています。時事のトピックに関しては、部会報に加えて、ニュースレターの発行も随時行っていければと考えております。

部会報、ニュースレターへの原稿等は随時受け付けておりますので、リスク部会員の皆様からの寄稿もお待ちしておりますので、よろしくお願いいたします。

部会報、ニュースレター、及び部会HPへのご意見、ご要望、ご質問等がありましたら、下記メールアドレスまでお寄せください。

E-mail: hmuta@tcu.ac.jp

リスク部会のHP: <http://risk-div-aesj.sakura.ne.jp/index.html>

原子力学会員の方は、どなたでもリスク部会にご入会いただけます。リスク部会への入会をご希望の方は、原子力学会Web サイトの部会入会ページ (<http://www.aesj.net/activity/divisions>) から行えます。